「根本概念」と学問論的課題
—— ハイデッガーの場合 ——

星　　敏　雄

[目　次]

1. 世界観哲学と学問論的哲学
2.「学の実存論的概念」と根本概念—ハイデッガーのカント講義を土台に—
　2−1.『存在と時間』における「根本概念」
　2−2.『存在と時間』における「学の実存論的概念」
　2−3. 最近刊行されたカント講義等における「根本概念」と「学の実存論的概念」
3. アリストテレス『形而上学』での普遍学の構想と学問論的課題

1. 世界観哲学と学問論的哲学

三つのHと呼ばれる哲学者，ヘーゲル，フッサール，ハイデッガーは歴史の場面で強い影響力を持った哲学者達であったことは確かである。ヘーゲルはヘーゲル左派を生みだし，フォイエルバッハはあの有名な科白，「哲学者は世界を様々に解釈してきたがこれからは世界を変革しなければならない」を言ったわけだし，カール・マルクス以降のその後はわざわざ述べるほどでもない。フッサールのパリ講演がはずみとなってサルトルやメルロ＝ポンティ達の実存哲学者がフッサール現象学を方法として採用し，政治批評，演劇活動などで実存を高らかに語ったのは記憶に新しい。サルトルがフッサールのパリ講演を聞いての感想に，「目の前のコップを語る哲学が出現した」と言ったというのは有名である。ハイデッガーは彼の主著である『存在と時間』で「現存在の実存論的分析論」を展開し，人間存在を本来性と全体性において分析し，さらに学問の外の人間の日常性までも鮮やかに分析し，人間の頽落した非本来的在り方をダス・マンとして，また本来的在り方を「死への先駆」に求めた，あの徹底的分析でわれわれを魅了したことは確かである。彼らは二十世紀の哲学・文化の歴史の中で人としてのわれわれの生き死にに影響を与えたことは誰も否定できないであろう。それ故彼らを，世界観的哲学，人生論的哲学，最近の流行の言い方では「応用哲学」，「臨床哲学」として，その典型として見る，またはその先駆的形態，模範として見る，または解釈したがるのは無理からぬところである。実際そのような解釈傾向は最近の有力な流れである。最先端のフィロロギー（文献学）を身にまとい出てくるこの見解はしかし極めて古いオルドナー（oldtimer）の体質であることが多いように見受けられる。

というのは，逆にこの三人の哲学者が口を揃えて，諸科学の「根本概念**Grundbegriffe**」を著作で強調していたこと，このことは全く知られていない。①ヘーゲルは『エンチクロペディー』で，「根本概念」に言及して自らの『エンチクロペディー』の目標を述べている。（『エンチクロペディー』（第三版§16）哲学以外の学は表象から出来上がったものとしての概念を受容し自らの扱う対象の必然性の正当化を果たしていない。エンチクロペディーは諸学の全範囲をその学の対象と対象の根本概念において考察し，諸学の根本概念の由来を明らかにする。こうヘーゲルは言っていた。（拙稿「エンツュクロペディー」，『ヘーゲル事典』，弘文堂，平成4年，47頁右参照）②フッサールも彼の主著『イデーン』第一巻においてやはり「根本概念」を現象学的還元の主要な操作の中で位置付けていた。そして③ハイデッガーもまた彼の主著

『存在と時間』の序論第三節で「根本概念」を語っていた。

しかし，それに関連して断固として指摘しておかなければならないことがある。①先ずヘーゲルだが，彼は日常的な「自然的意識」に対して意識の諸形態を点検し経巡って「絶対知」という『精神現象学』の最終段階に駆け上った。「絶対知」とは「学の立場」のことで，『精神現象学』は自然的意識から学への上昇を記述したものである。その学こそは自然的意識にとってはdie verkehrte Welt（逆転した世界）（PhG S. 128）を形成するものであった。ヘーゲルは日常的なおしゃべりをRäsonierenとして軽蔑しきった。ヘーゲルの目指すものは，諸科学と同じかそれ以上に確固とした《学の衣装》を哲学に着せることであった。そして，②もちろんフッサールの目指すものはヨーロッパ諸科学の基礎学としての超越論的現象学を確立することであった。たとえフッサール自身が基礎付けという夢は見果てたと言ったとしても，目指していたのは「学の基礎付け」ということであったことは，われわれによるその評価は別として，否定できない事実である。フッサールはまた彼の著作である『厳密な学としての哲学』で「世界観的哲学」を断固として拒絶していた。③ハイデッガーもまた彼の主著である『存在と時間』のただ中で，その目標を性格付ける「存在の意味への問い」に関連して諸科学の「根本概念」を語っていた。「現存在の実存論的分析論」はひたすらこの「存在の意味への問い」を明らかにするためのものであり，それ故にこの実存論的分析論は「暫定的」とハイデッガー自身によって性格付けられている。現存する『存在と時間』はもちろん前半部だけであって，われわれに残されているのは「現存在の実存論的分析論」だけである。正確に言えば，二つの部門の内，第一部「時間性ををめがける現存在の学的解釈と，存在の問いに対する問いの超越論的地平としての時間の説明」の第一篇「現存在の予備的な基礎的分析」と第二篇「現存在と時間性」だけであり，第三篇「時間と存在」，第二部「テンポラリテートの問題性を手引きとする存在論の歴史の現象学的破壊の要綱」は現在発見されていない。こういった事情がそうじて『存在と時間』を実存分析としてのみ読んで，「存在論」のコンテクストで読まない傾向を生んでいるように見える。しかしハイデッガーの基本的意図は当時はそうではなかった。またハイデッガーの死後刊行されている講義録には「世界観的哲学」の拒絶の姿勢が見て取れる。

三人の哲学者の場合，人生いかに生きるべきかを論じているというよりは，諸科学の基礎学としての哲学，つまり哲学の学問論的機能をきわめて強固に意識していたとは言えまいか？実際人生をどのように生きるべきか迷った場合哲学者たちのところに相談にゆくというのは欧米でもまず耳にしないことではないか。

2.「学の実存論的概念」と根本概念——ハイデッガーのカント講義を土台に——

2－1.『存在と時間』における「根本概念」

まずハイデッガーが主著『存在と時間』で語った「根本概念」とそれに関係する「学の実存論的概念」を確認しておく。序論第三節でハイデッガーは，諸学→存在論→「存在の意味への問い」という三つの層をはっきり区別している。要約してみるとこうなる。諸科学は，存在するものをこれこれしかじかに存在するものso und so Seiendesとして研究の営みを遂行している。諸科学は，分化しており各々の研究領域として「特定の事象領域」（SZ S. 12）（例えば言語，歴史など）をもっているが，それは「学以前に経験され，解釈されていることによって，ある種の仕方で果たされている。」（ibid. S. 13）このようにして諸科学は各々の「根本概念Grundbegriffe」（ibid. S. 9）をもっているが，この根本概念は危機にさらされる。（数学における形式主義と直観主義，生物学における生気論と機械論，物理学における相対性理論と物質の問題，歴史学，神学の場合をハイデッガーは

挙示している。）（ibid. S. 9－10）研究とその研究の対象である事象との関係が危機に面して揺らぐ。ところでこの関係を定める根本概念が真正であるためには，この根本概念に対応する事象領域が先行的に研究されていなければならない。しかし，さらに，この特定の事象領域をそのように研究するということは，この事象領域が存在するものの区域から獲得されたのであるから，この事象領域＝存在するものを，その存在の根本機構にもとづいて解釈することに他ならない。つまり，諸科学は存在論を要求する。しかしさらに，この存在論自体が，さらに「一つの手引き ein Leitfaden」である「存在の意味への問い」を必要とする。というのは「存在論的に問うことは，存在者の存在を追求するその諸研究（＝諸存在論）が，存在一般の意味を論究しないままにしておく限りでは，それ自身あくまで素朴で見通しのきかないものにとどまる。しかも，存在論は，存在のさまざまの可能的な在り方を，演繹によらず構成する系譜学という課題をもっているのだが，まさにこの存在論的課題こそ，》何を一体われわれは『存在』という表現で考えているのか was wir denn eigentlich mit diesem Ausdruck 'Sein' meinen《ということに関して，前以ってわからせておく必要がある。」（ibid. S. 17）ここには三つの層がある。諸科学とそれを基礎付ける「存在論」と存在論を基礎付ける「存在の意味への問い」である。

> 「存在の問いがめざすのは，存在者をこれこれしかじかの存在者として研究し尽くして，しかもその際，その都度既に或る存在了解の内で働いている，諸科学を可能にする一つのアプリオリな条件であるばかりでなく，存在的な諸科学に先立っていてしかもそれらの諸科学を基礎付ける諸存在論自身を可能にする条件そのものである。 Die Seinsfrage zielt auf eine apriorische Bedingung der Möglichkeit nicht nur der Wissenschaften, die Seiendes als so und so Seiendes durchforschen und sich dabei je schon in einem Seinsverständnis bewegen, sondern auf die Bedingung der Möglichkeit der vor den ontischen Wissenschaften liegenden und sie fundierenden Ontologien selbst.」（ibid. S. 18）

この場合重要なことは，存在論に諸科学の根本概念を究明することが課せられていることである。

2－2.『存在と時間』における「学の実存論的概念」

さて以上の根本概念との連関で「学の実存論的概念」が『存在と時間』では登場しているが，かの著作においてはかなり不明瞭な形においてであった。（わたしはかつて拙著『意味と身体』［弘文堂平成8年，第四章，特に127頁］の中でこのことを指摘しておいた。）

つまり私の見るところでは，先ず第一に，「学の実存論的概念」を解釈して，それは人間の実存に根ざした学の概念という意味であり，「学の実存論的概念」というのは学問研究者が自らの学問研究において日常世界において生きている実存をその学に映し出しているという，そのような学の意味があるというような具合にだけ了解してはならないのであると主張した。

『存在と時間』には二つの「学の実存論的概念」がある。357頁のそれと362頁のそれである。357頁の説明では，ハイデッガーは

> 「実存論的概念が学を実存の様式として了解し，存在者を暴露または開示する世界―内―存在の様態として了解する Der existenziale Begriff versteht die Wissenschaft als Weise der Existenz und damit als Modus des In-der-Welt-Seins, der Seiendes bzw. Sein entdeckt, bzw. erschließt」（ibid. S. 357）

と述べている。しかしこの説明は，ハイデッガー自身によってこれでは「学の充全な実存論的な解釈は行われない」（ibid. S. 357）と限界が指摘される。362頁での「学の実存論的概念」は次のようにパラフレーズされていると読める。（学を）

> 「導く主導的存在了解内容を根本概念のうえか

ら仕上げることでもって，諸方法の手引き，概念性の構造，このものに帰属していて真理や確実性が獲得される可能性，根拠付けと証明の様式，拘束性の様態，伝達の様式等が決定される。これらの契機の全体が学の完全な実存論的概念を構成する。Mit grundbegrifflichen Ausarbeitung des führenden Seinsverständnisses determinieren sich die Leitfäden der Methoden, die Struktur der Begrifflichkeit, die zugehörige Möglichkeit von Wahrheit und Gewißheit, die Begründungs- und Beweisart, der Modus der Verbindlichkeit und die Art der Mitteilung. Das Ganze dieser Momente konstituiert den vollen existenzialen Begriff der Wissenschaft.」(ibid. S. 362−3)

二つの「学の実存論的概念」のうち前者（357頁のもの）は充全な実存論的概念ではないとされ，後者（362頁のもの）が学の実存論的概念の充全な概念であるとされている。そこでこの後者こそ真正な，本物の「学の実存論的概念」であるとわれわれが理解すべきなら，そしてもちろんそうするが，この後者は多分に学問論的，科学論的であると言わなければならない。つまり二十世紀末の今日的に言えば，クーンがかの『科学革命の構造』で「パラダイム」と表現した事柄である。ある「パラダイム」のもとで研究している研究者集団が「通常科学normal science」に従事しているが，彼ら科学者が従っている「パラダイム」がその研究の方法，真理の証明の様式，その伝達法を定めているからである。その学問固有の方法die Leitfäden der Methodenと叙述のやり方die Struktur der Begrifflichkeitと真理の型die zugehörige Möglichkeit von Wahrheit und Gewißheitさらに実験などの証明の手続きdie Begründungs- und Beweisartさらに研究発表の仕方と研究集団の在り方der Modus der Verbindlichkeit und die Art der Mitteilungとここでハイデッガーが述べているものは，まさにクーンが通常科学に従事する研究集団が守るべきとしたパラダイム（研究方法などの）に他ならない。またgrundbegriffliche Ausarbeitung des führenden Seinsverständnisses（その個別科学を主導する存在了解の根本概念的仕上げ）とはこの箇所の前でハイデッガーが問題としていた「近代科学の成立」のこと（つまり『存在と時間』第69節b「配視的な配慮的な気遣いが世界内部的な事物的存在者の理論的暴露へと変様することの時間的意味」のこと），ハイデッガー自身の言葉ではmathematische Entwurf der Natur selbst（ibid. S. 362）を具体的に指示しており，これはクーンの表現では近代科学というニュートンにはじまる「新パラダイム」のことであり，この意味ではハイデッガーの「根本概念」は「新パラダイム」のことでもあると言っても無理はない。この362頁の後者の引用箇所で根本概念と「学の実存論的概念」は幸せな結合を果たしている。

とはいえ，「学の実存論的概念」の前者と後者の関係は，「非充全—充全」以外には見通しがつかないものとなっている。すでに指摘した，1. 諸学—2. 存在論—3.「存在の意味への問い」という三層において「根本概念」を研究するのはどこであろうか？2ではその真理性が吟味されるであろう。しかし，既に，諸学はその事象領域を境界付けている存在区域を「学以前に経験され解釈されることによって，ある種の仕方で既に果たしている」(ibid. S. 9) が，「こうして生じた根本概念は，差し当たってはその領域を最初に開示する手引きにとどまる。」諸学が受容している「根本概念」は「前存在論的」に与えられる。しかし，諸学の危機によって根本概念が揺らぐこともあり，修正されることもある。かくして根本概念を汲み尽くす研究は最終的には存在論に求められる。(ibid. S. 9−10) わたしはこのような「根本概念」と「実存論的」の関係をかつて次のように評価したが，これは今でも正しい。

「実存論的」でハイデッガーによって意味されているのは現存在の前存在論的存在了解に戻るということであると考えるべきだ。もちろんこの場合の現存在は世界—内—存在であり，配慮に基づく独特の世界との交渉をしているのであ

る。今の節で活躍するのは，しかし露呈や開示等の真理概念である。測量から幾何学が成立したというフッサール的アプローチはここにはない。道具的存在者を事物的存在者として注視したり，主題化する揚合，その注視や主題化はどのように動機付けられているのだろうか。この場面でハイデッガーは現存在の世界―内―存在である由縁を無くしてしまっている。現存在の世界―内―存在という性格が弱まり，存在了解が前面に押し出されてはいないか？実際『現象学の根本問題』以降，存在了解に話は集中する。ハイデッガーの実存論的とはそのようなものだと我々は思うべきなのかもしれない。「存在の意味への問い」と現存在の実存論的分析論が接続される時，このような実存論的分析はひたすら存在論の可能性を問うという存在論的性格のみを持たされているのだ。（拙著『意味と身体』弘文堂，平成8年，128−9頁）

この関係はハイデッガーの最近公刊された講義録でも同様な関係が指摘できる。

2−3. 最近刊行されたカント講義等における「根本概念」と「学の実存論的概念」

1927年刊行の『存在と時間』における，以上のような「根本概念」と「学の実存論的概念」の議論は，最近刊行されてきた『ハイデッガー全集』の各種の講義録の中でもハイデッガー自身による議論がかなりあり，ハイデッガーにとって実は生涯を通じて一貫性のある問題群であったことが確認できる。

「根本概念 Grundbegriffe」はさらに拡張されて，諸科学だけでなく，哲学それ自身にも向けられ，「形而上学の根本概念」が問題とされてくる。例えば，29年／30年のフライブルク大学冬学期講義『形而上学の根本概念―世界・有限性・孤独』では題名から明らかであるが，形而上学の根本概念が語られ，さらに中・後期ハイデッガーでは一般に学が放棄されるので，「哲学は学でも世界観の提示でもない」（Martin Heidegger, Grundbegriffe der Metaphysik: Welt—Endlichkeit— Einsamkeit, Gesamtausgabe, II Abteilung Band 29/30, S. 1）と宣言される。また1941年のフライブルク大学夏学期講義『根本概念』も哲学の根本概念の究明が課題となっている。（Martin Heidegger, Grundbegriffe, Gesamtausgabe, II Abteilung Band 51）

しかしこれは中・後期ハイデッガーの問題である。『存在と時間』に時間的に近いものでは，1925年マールブルク大学夏学期講義『時間概念の歴史へのプロレゴーメナ』での「根本概念」への言及と物理学の素粒子論と相対性理論などの諸科学の危機論がある。これはほぼ『存在と時間』と同等の記述である。（Martin Heidegger, Prolegomena zur Geschichte der Zeitbegriffes, II Abteilung Band 23, S. 5）しかし当面の問題からして興味深いのは1927年／28年のマールブルク大学冬講義『カント純粋理性批判の現象学的解釈』である。ここで『存在と時間』以降持ち越された，「根本概念」と「学の実存論的概念」の関係についての続論がなされている。（Martin Heidegger, Phänomenologische Interpretation von Kants Kritik der reinen Vernunft, Gesamtausgabe, II Abteilung Band 25）これを上との関連で究明して見よう。

この講義の第2節aのαは「学の実存論的概念―（中略）―存在者の存在の前学的了解」（ibid. S. 18）と題されており，前項目で私が示した「学の実存論的概念」を前存在論的把握とした解釈が正しいことを既に示している。さて，ここでのハイデッガーによると認識もひとつの「存在への関わり」つまり存在関係であり，それ故に一種の「実存」であり実存の中で可能性として掴まれたものである。（ibid.）ハイデッガーは学の本質を実存の可能性から掴むのであると宣言する。（ibid. S. 20）現存在は前存在論的な存在了解において存在者の存在を ontisch にひとまず把握している。（ibid. S. 23）この様な前学的関わりから学的関わりへと態度変換する Umstellung のであるが，それは「対象化 Vergegenständlichung」（ibid. S. 26）による。これは『存在と時間』第5節の「主題化 Thematisierung」に対応すると考えられる。さて，「存在するものへの関わりは存在了解によって

先行的に解明され導かれることによってのみ可能である。」(ibid. S. 27)「存在するものが存在するものとして対象となる学の中では存在了解をはっきりと形成することが必要である。」(ibid. S. 28)「生物学的な問題設定や研究は必ず生命や有機体についての了解に基付いて動いている。」(ibid.)「生物としての存在するものを根本において性格付けているものを境界付けている概念，すなわち当の（生物学という）学問の根本概念 Grundbegriffe が生じてくる。」(ibid. S. 28) この講義では諸学の「根本概念」と「学の実存論的概念」は『存在と時間』の時とは違ってダイレクトにこのように架橋されている。ここまでは私の前項目での指摘は正しいことを再確認出来る。

bは次ぎの文ではじまる。「存在するものについての学は対象化の内で根拠付けられる。」(ibid. S. 32) 諸科学は自らの対象領域を区分けする時自らの学の根拠付けを果たしていると言うのであろうか？或る意味でそうでありそうでないとハイデッガーは言う。対象化されなければ学は成立しない。しかし，自らの対象領域の画定には「より深い根源的な根拠付け」が必要であり，その根拠付けはその当の学自身によっては果たされないと言う。(ibid. S. 33) 例えば物理学者は自らの使用する概念を「通俗的」なものに依拠しており，普遍性に背を向けている (ibid.) とされる。

> 「根本概念そのものにおいて何が意味されているか，ということを問うための確かな方法は突如として欠落してしまう。」(ibid. S. 35)

このことは「前存在論的な存在了解を存在の探究へ，存在論へ形成することによって可能となる。」または

> 「全てのontischな対象化は存在体制の存在論的なまたは前存在論的なEntwurf（企投）に基付いてのみ可能である。しかしまた同時に存在に対する存在論的な問題設定や対象化も或る根源的な基礎付けを必要とする。この基礎付けはわれわれが基礎的存在論と呼ぶものによって成し遂げられる。」(ibid. S. 36−37)

ここには『存在と時間』と同様な三層構造が見い出される。ontischな対象化（＝諸科学）—存在論（前ontologischな存在了解等）—基礎的存在論 Fundamentalontologie である。この「基礎的存在論」はまえの『存在と時間』では「存在の意味への問い」に該当する。

しかし，ここではハイデッガーは諸科学を味方につけようとしている。いわく，「すべての学は潜在的には，そしてその根本においては哲学である。Alle Wissenschaft ist latent und im Grunde Philosophie」(ibid. S. 38) すべての科学は先行的に自らの対象領域を何らかの仕方で区分けしており，その限りで前存在論的存在了解を持っているわけであり，それを明示的に仕上げれば哲学となるとハイデッガーは主張する。「学の内で実存的に存在することは哲学なしでもohne Philosophie可能である。」「人は哲学をさけて通ることもできる。」「しかし，人は哲学を人間的実存の最も深い可能性として選ぶこともできるのである」とハイデッガーは言う。(ibid. S. 39) そうなのだ。ここで一切が明らかとなる。自らの行う学の根本概念を非哲学的に仕上げずに置くこともできれば，それを哲学的に明示的とすることもできる。その選択は実存的選択であるのだ。それ故に根本概念と「学の実存論的概念」は繋がっていたのだ。

3. アリストテレス『形而上学』での普遍学の構想と学問論的課題

実はハイデッガーなどによって主張されている諸科学の根本概念の究明という「学問論的動機」は，アリストテレスが「第一哲学（＝形而上学）」を構想したときに「普遍学」というアイデアの下で考えていたことであり，ハイデッガーはそれを継承していると評価すべきである。なによりもヘーゲルは古代ギリシャ語もほとんど読まれぬ時代において，アリストテレスの復活を願った人であり，ハイデッガーもまた

多くの彼の哲学の概念装置をアリストテレスから汲み取っているのであった。アリストテレスは『形而上学』で次のように語っていた。

> 我々の求めているのは，諸存在の原理や原因である。ただしここでは，言うまでもなく明らかに，存在としての諸存在のそれらを求めているのである。というわけは，たしかに健康であることや仕合せであることなどにも原因があり，数学的諸対象にも原理とか構成要素とか原因があり，そして一般にあらゆる推理的な学やなんらかの推理知を含む学は，厳密ににせよ粗略ににせよ，なんらかの意味で原因や原理をその対象として求めておりはする。しかしこれら諸学は，それぞれ**或る特定の存在や或る特定の類**を抽き出してこうした存在の研究に専念しているが，しかし（1）存在を端的に，すなわち存在をただ存在として研究するものではなく，また（2）その**研究対象のなにであるか**［本質］についてはなんの説明もしないで，かえってこれから出発している。すなわち，これら諸学の或るものはこれを感覚に自明的であるとし，他の或るものはそのなにであるかを仮定として許しておいて，ここからそれぞれの対象とする特定の類の存在についてそれの自体的諸属性を或るものは必然的に或るものは粗漏に論証している。だからして，諸存在の実体や本質を論証することは，明らかにこのような帰納方法（エパゴーゲー）によっては**不可能**であって，**或る他の解明方法によらねばならない**。同様にまた，（3）これらの諸学は，その対象として専念するところの存在の類が果して存在するか否かに関しても，すこしも語らない。―それというのも，もののなにであるかを明らかにすることとその果して存在するか否かを明らかにすることとは，同じ性質の推理力の関することであるからである。（アリストテレス『形而上学』出隆訳，アリストテレス全集，第12巻，岩波書店，1968年，192−3頁）

明らかに上の引用の（2）がわれわれの今問題にしている「根本概念」に相当する。「諸学の研究対象のなにであるか［本質］についてはなんの説明もしないで，かえってこれから出発している」というのが相当すると考えて差し支えないであろう。科学の行う「帰納」によってはこれは解明されず，感覚的に自明とか仮定として前提されるのみなのである。この解明はアリストテレスによって普遍学としての「オン・ヘー・オンの学」の課題として語られていた。ハイデッガーが「根本概念」について語るのは，そしておそらくヘーゲルも，このような伝統との関連においてであることは見逃されてはならない。

とはいえ，問題はわれわれがこの課題を引き受け，社会科学を含む自然科学，いや諸科学全般の根本概念を究明することであることは論を待たない。そのようなネガティブな歩みの中でこそ，普遍学の理念は自らをおもむろに現すのに違いないのだ。

註

使用したハイデッガーの『存在と時間』は，M. Heidegger, Sein und Zeit, 15Aufl., 1984である。引用文の強調等は原著作者に由来しない。引用はSZ S. 123という風に頁数のみで示した。訳は中央公論社『世界の名著』に収納されている渡邊二郎他訳を使ったが一部訳語などを変えてある。ヘーゲルの『精神現象学』はSuhrkamp社版でPhG S. 18という風に示した。